

6  
月



# 美園小だより

令和8年5月29日  
さいたま市立美園小学校  
第193号 児童数 1036名  
Tel 048(812)6611  
Fax 048(878)6660

ふるさとを強く思っている人は、いくらでも遠くへ行ける

校長 河野 秀樹



ピロティの上にある巣に、ツバメが戻ってきてくれました。ツバメは身近で見られる渡り鳥の一種です。家に巣を作ることから、家を守るという縁起の良い鳥で、ツバメの巣のある家は安全であるという言い伝えもあり、巣立った後の巣を大切に残しておくことも多いそうです。

アントニ・ガウディが手がけたスペインのバルセロナにあるサグラダ・ファミリアを知っていることと思います。140年以上かかっても未完成である世界遺産です。その彫刻を手掛けて、完成に向けて貢献しているのが、外尾悦郎氏です。

私が外尾氏を知ったのは、芸能人が外尾さんにインタビューをしている番組でした。昨年秋には、外尾氏の出身地福岡で講演を聴く機会がありました。そこで共感したことが「ふるさとを強く思っている人は、いくらでも遠くへ行ける」ということでした。「ふるさと」は、子どもたちがまだ小さく何も分からない、知らないときに、周りの大人がいろいろ教えたところでした。それは時に厳しいものだったり、無条件で守ってあげたりしたところでした。

外尾氏は、大学を卒業して美術の教師をしていたとき、石の文化があるヨーロッパに渡り、思いっきり石を掘ってみたいと思ったそうです。最初に訪れたのはパリ。しかし心に感じるものが無く、スペインでは何かがあるのではないかと考え、バルセロナに行きました。九州で生まれ育ったことから美味しいものが無いと生きていけず、福岡に負けない美食があるバルセロナに魅了されたということでした。このことが、異国の地で長く彫刻家として活躍することにも繋がっていったと言います。異文化の中で、一人正しいと思うことを主張し続けることは難しいことだったそうです。一所懸命にやっていると「仕事のしすぎだ」と仲間が休ませようとしてきて、最初はニコニコしていた外尾氏も、あまりにうるさいので本気で怒り、博多弁で「うるさい」と伝え、そこで初めて怒っていることを理解してくれたそうです。周りはずべて異文化で、一人で「こっちが正しい」と思っているにもかかわらず、なかなか聞いてくれない。しかしそこで折れることなく、まっすぐ背筋を伸ばして、じっとその現実を受け止める。もし、自分の意志を曲げてしまっていたら、サグラダ・ファミリアの彫刻家としての47年間はなかった。いつも最後に救ってくれたのは「ふるさと」であったと語ってくれました。

世界のどこへでも行ける力の源は、「ふるさと」です。美園小の子どもたちにとって「ふるさと」は家庭であり、美園の地域であり、美園小です。これから先の見えにくい世の中をたくましく生きていかなければならないでしょう。物理的にも精神的にも地元から遠く離れた地で活躍していかなければならないこともあるでしょう。その時、たとえ一人になったとしても、自分の「ふるさと」を持っていれば進むべき道を迷わず進んでいくことができるのだと思います。